

(2002年7月12日)によると、1年間の簡易鑑定において1人の鑑定医で106件の鑑定を行った地検がある一方で、逆に31人の鑑定医が66件の鑑定を行っていた地検もあった、という報告があり、鑑定結果に偏りが生じる可能性も示唆された。

これらの根底には検察側・鑑定医側双方において、個人・県レベルでの技量や簡易鑑定に対する考え方などの違いがあり、今後は鑑定・検察処分が正確かつ平等に行われるよう司法精神医学を確立していかなければならない。

## 9 高機能広汎性発達障害に対する治療・教育援助の試み

藤田 基・桜井 観喜

新潟県立精神医療センター

当院では広汎性発達障害のこどもの支援を30有余年に渡って継続している。最近、広汎性発達障害(PDD)のこどもの来院が激増しており、従来の体制では対応しきれなくなっている。従来の個人療法中心の援助では、高機能群の対人関係の困難に直接アプローチできないことが問題となっている。また、障害は生涯にわたるものなので患者や親の自助グループ的つながりを育成する必要があるが、これも個人療法では対応できない。以上のことから治療の構造にグループを導入した。(1) PDDのこども本人に対してはSSTを援用した集団精神療法、(2) 家族・教師に対して心理教育的アプローチを援用した家族教室を、それぞれ2001年4月より設置した。

その結果、こども本人については、対人関係や会話の困難に対して、グループの中で直接介入し改善することができた。また、家族や教師に対しては、系統的なプログラムの中で、必要な知識を習得させると共に、家族間のつながりが深まり、自助活動の育成を援助することができた。

以上のような治療システムの変容の、治療効果に対する客観的な影響についての検討は今後の課題としたい。

## 10 Paroxetine 血中濃度に及ぼす CYP2D6 遺伝子多型の影響

澤村 一司・鈴木雄太郎\*・佐藤 聡

川嶋 義章・下田 和孝\*\*・染矢 俊幸

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
精神医学分野

新潟大学大学院医学研究科精神医学  
専攻\*

滋賀医科大学精神医学教室\*\*

### 【目的】

Paroxetine (PAR) の代謝に関与する肝酵素 cytochrome P450 (CYP) 2D6 の変異アレルと PAR 用量が、PAR 血中濃度に与える影響について検討した。

### 【対象】

対象は新潟大学医学部附属病院精神科に外来通院もしくは入院しており、書面で同意の得られた、PAR 内服中患者 48 名。ベンゾジアゼピン系薬剤以外の併用薬のあるもの、身体疾患の明らかなものは除外した。

### 【方法】

採血は同一処方で2週間以上経過後におこなった。PAR 血中濃度測定は高速液体クロマトグラフィー法 (HPLC) にておこなった。CYP2D6\*5, CYP2D6\*10 変異アレルは末梢血から DNA を抽出後、PCR 法にて同定した。

### 【結果および考察】

PAR の各用量 (10, 20, 30, 40mg/day) における血中濃度 (平均±SD) は、それぞれ 6.1 ± 9.7, 38.1 ± 37.7, 75.9 ± 48.6, 141.9 ± 128.2 ng/ml であった。40mg/day の PAR 血中濃度は 20mg/day の血中濃度と比較して約4倍であり、PAR 用量と血中濃度との間には下に凸の曲線回帰が認められた。

CYP2D6\*1, \*2, \*5, \*10 のアレル頻度はそれぞれ 45.8, 14.6, 3.1, 36.5% であった。用量の異なる4群 (10, 20, 30, 40mg/day) において、CYP2D6 変異アレル数が0個, 1個, 2個の3群間で、平均 PAR 血中濃度の比較をおこなった。その結果、特に低用量群 (10mg) で、変異アレル数2個の群の平均 PAR 血中濃度 (6.0 ± 4.6 ng/ml)

は、変異アレル0個の群 ( $1.2 \pm 0.9\text{ng/ml}$ ) と比較して、有意に高い ( $p < 0.05$ ) という結果が得られた。したがって PAR 血中濃度においては CYP2D6 遺伝子多型の関与が、特に低用量で大きいと考えられる。

## 11 統合失調症の分子遺伝研究

金子 尚史・村竹 辰之\*・天金 秀樹\*\*  
 辻 省次\*\*\*・染矢 俊幸\*\*\*\*  
 新潟大学大学院医学研究科精神医学  
 専攻  
 新潟大学医学部附属病院精神科\*  
 国立療養所西新潟中央病院精神科\*\*  
 東京大学大学院医学系研究科神経内  
 科\*\*\*  
 新潟大学大学院医歯学総合研究科精  
 神医学分野\*\*\*\*

当教室で行っている統合失調症の分子遺伝学的研究について報告した。関連研究では、疾患感受性候補遺伝子である BDNF 遺伝子、NOTCH4 遺伝子、5-HTT 遺伝子について同遺伝子内およびもしくはその近傍に位置する遺伝子多型を検討した。また、現在行っている連鎖研究についても報告した。

BDNF 遺伝子では患者-対照間で、5-HTT 遺伝子においては患者-対照間に加え発端者とその両親を用いた伝達不平衡テストにて検討したが、いずれも遺伝子多型の頻度に有意差は見られなかった。NOTCH4 遺伝子では、検討した5つのマーカーのうち、患者対照研究では (CTG) の繰り返し多型で、患者、両親のトリオによる伝達不平衡テストでは (TTAT) の繰り返し多型で有意差が見られたが、多重検定の修正後にはその差は有意とはならなかった。

現在、日本国内にて見出された統合失調症多発大家系を用いた連鎖研究を行っており、終了次第結果を報告する予定である。また、日本国内における罹患同胞対をもちいた多施設共同研究による連鎖研究にもサンプル収集および解析施設として参加している。

今後は、遺伝的異種性の克服、検出力、特異性の向上、大量データの迅速処理を目指し、研究手

法をさらに改善して研究を進めていきたい。

## 12 アルツハイマー型痴呆における視覚性事象関連電位とストループ・テストの比較

吉浜 淳・結城 麻奈・坂井 乃美  
 直井 孝二・松田ひろし・増田 幸枝\*  
 伊藤健太郎\*・飯森眞喜雄\*  
 立川メディカルセンター柏崎厚生病院  
 精神科  
 東京医科大学精神医学教室\*

### 【目的】

健常成人、健常老人及びアルツハイマー型痴呆 (DAT) 患者に対し、視覚性事象関連電位 (ERP) 検査とストループ・テストを施行し、その結果を比較・検討する。

### 【対象】

健常成人 30 名 (年齢 mean  $\pm$  SD  $34.0 \pm 10.7$ )、健常老人 10 名 ( $80.4 \pm 7.4$ )、DAT 患者 10 名 ( $78.2 \pm 5.3$ ) を対象とした。なお被験者には検査について説明を行い、書面にて同意を得た。

### 【検査方法】

#### ERP

検査課題は標準的な視覚オッドボール課題を用いた。刺激は標的刺激 (20%) に赤、非標的刺激 (80%) に青、黄、緑の四角図形をランダムにディスプレイに呈示し、被験者は赤色の図形が呈示された場合に出来るだけ早くボタンを押す課題を課せられた。

#### ストループ・テスト

被験者は 4 種類 (赤、青、黄、緑) の漢字を読み上げ (W cards)、次に同じ 4 種類の色を名づけ (C cards)、さらに色と漢字が一致していない漢字の色を名づける (CW cards)。各課題 50 個の読み上げ時間と誤りの回数を測定した。

### 【結果】

#### ERP

- 1) 健常老人群、DAT 群共に健常成人群に比較して有意に潜時の延長、振幅の低下が認められた。
- 2) 健常老人群と DAT の比較では、N100 では有意な差は認められなかったが、P300 では、潜時